自由南アフリカの声
Voice of Free South Africa

2000年5月
No.23

発行　／　アジア・アフリカと共に歩む会
Published by Together with Africa and Asia Association (TAAA)

2000年５月の報告と予定

- ■ 2月に南アを訪問
  ケープタウンとダーバンとジョハネスバーグ周辺
- ■ 3月に浦和市で活動報告会
- ■ 4月にデヴェトンのMEIへ本代送金
- ■ 5月に西ケープ州とハウテン州で移動図書館運行式典
- ■ 5月に本と地球儀をダーバンに送付予定

目次

南アフリカ訪問記……２
　ハウテン州の移動図書館活動……６
移動学校図書館　その３……７
マーガレット・グレイヤーを偲んで…９

初めて移動図書館が来た！　ショシャングベの小学校で

南アフリカ訪問記

野田千香子（TAAA 代表）

2000年２月２日（水）から２月11日（金）までTAAAから代表の野田千香子と会員であり司書である山田玲子が南アフリカを訪れた。TAAAの活動である英語の本送付と移動図書館事業に関する現地NGOとのコーディネートと図書活動の指導等を目的とする訪問であった。訪問先はケープタウン、ダーバン、ジョハネスバーグの３個所であるが、夫々の個所を中心に50～150キロの範囲で多くの学校を含む活動先を訪れる忙しい日程であった。３個所の移動は空路での１～２時間の行程、着いてからは現地の州職員やNGOスタッフなどと車を使っての移動となった。野田にとっては６回目、山田さんにとっては初めての訪問である。また、今回ケープタウン以外は南アのユネスコ事務所職員の菊川穣氏が同行された。ユネスコの活動の一環に識字活動があり、１昨年よりTAAAの移動図書館活動に注目、協力体制をとることに決定、菊川氏が全面的に協力してくれている。南アに駐在員のいないTAAAにとって100人力の頼もしい存在である。結論から言えば今回は、昨年の訪問時とはちがい、大小の進展と成果が見られ、今後の明るい展望の啓かれた旅となった。

１）ケープタウンとその周辺

問題点：詳細は会報に連載中の報告文「南アフリカ移動図書館」を合わせて読んでいただきたいが、１年半前に送った車２台がNGOマシフンディスの財政難と近隣２市が予算の獲得に失敗したこと等の理由により、依然として稼動されずにある。（その後５月より運行可能となった）運行条件の揃っている西ケープ州教育省へ移譲し、強力なNGOと教育省の手で運行計画が推進されている。問題点は車が南ア国内に移入されてから期間が経っているため、車の登録に手間取っていること。車の登録を促すことも訪問目的の一つである。

行程：終始、州教育省の図書館情報サービス部メディアアドバイザー、ジューン・バージスと行動を共にした。

【マシフンディス】

TAAAとの移動図書館活動の責任者である西ケープ州教育省のジューン・バージスと共に、NGOマシフンディスを訪ねる。南アで数万と言われるアパルトヘイト時代からのNGOの一つであるが、近年、財政難で３月からTCOE（NGO８団体の連合組織）の事務所に合併されることになった。マシフンディスが上記の理由で２台の車を西ケープ州へ移譲することを了承した文書を見せてもらった。マシフンディスがTAAAから送った本を教育状況の貧困な地域の学校に配布し図書指導も行っていることはわかったが、スタッフのアレックスの財政状況説明により、移動図書館を運行していくだけの余力と指導力は期待できないことが判明し、教育省に一任することが賢明であることが明らかであった。スムーズに移譲が了承されたことで私達もむしろほっとしたのであった。

【西ケープ州教育省】

ケープタウン中心にある西ケープ州教育省を訪ねる。バージスの上司であるリン・トカルフェ部長に会う。２台の車の運行準備がすべて整っていることが判明する。運行にかかる費用は州から出ることが確定。エンゲン石油会社からガソリンガ寄付される。実際に運行に携わるのはエルギンコミュニティカレッジという強力なNGO。今後のTAAAからの英語の本送付に関しては教育省が責任をもって受け取り学校に配布するか或いは移動図書館で利用する。これらのことがリン部長を交えた会議で確約できた。

【ＮＧＯエルギンコミュニティカレッジ】

Juneの車でケープタウンから時速120キロ以上で１時間北上した高原地帯にコミュニティカレッジがある。美しい緑に囲まれた平屋の白いいくつかの建物に別れている。数人のスタッフとエンゲン石油会社の責任者と私達で移動図書館事業について話し合う。車の保管場所についても安全性が期待できそうである。書庫については現在、助成金を申請中である。ここの所長であるケヴィン氏はNGO活動に熱心かつ能力のある人に見受けられた。スエーデンのSIDAからの援助も受けてこの地域の教育事業に力を注いでいる。この地域には27の学校があり、日々60人の教師と300人の小学生から高校生、大人までが補習、職業訓練（コンピューター、農業指導等）その他の研修に励んでいる。学校に実験室がないためここに来れば使用できるといっても、利用希望者５千人に対してコンピューター12台、実験室１つでは、十分な施設には程遠い。こうした状況の中で移動図書館が果たす役割は大きいと、ケヴィン氏は力説する。

【ボトリヴィエール小学校のコンテナー図書館】

移動図書館がこれから稼動するグラボウ地区の学校の１つであるボトヴィエール小学校を訪ねる。この学校も地域の27の学校同様、資金不足と教材、施設の不足に悩んでいる。600人を越す生徒数では２部授業をしても図書室を置く余裕はない。ここには、地域で唯一初めてのコンテナー図書室が校舎脇に置かれている。濃いブルーに塗られ窓も取り付けられ、中では10人ほどの子供が床に座って熱心に本を読んでいた。ひとり1週間に20分程ここで本を選んで読む時間があるそうだ。子供たちは皆楽しみにしている。これは昨年11月にスエーデンのSIDAによって寄付されたものである。他の学校にこれから次々に作っていく予定はないと聞き、TAAAに余裕があれば、ダーバン港から入手可能な中古コンテナーを寄付していきたいと考え、ジューンに見積もりを作ってくれるよう頼んでおいた。移動図書館から借りた本の利用場所として現状では理想的と言えそうだ。

【ヘルマナス市の運輸省の出先機関】

現在の西ケープ州教育省の移動図書館開始を阻む唯一の問題を解決の方向へ一歩近づけるために帰り道に、ヘルマナスの自動車工場を訪ね車が良い状態で保管されているのを確認してから出先機関の事務所を訪ね、スムーズに登録が運ぶよう、所長さんに協力をお願いした。象が大好きという所長さんに山田さんと私は別れ際に「ぞうさん、ぞうさん」の童謡を聞かせてあげたが、効果のほどはわからない。（帰国後、５月２日に初運行となった）

【暮らし向き】

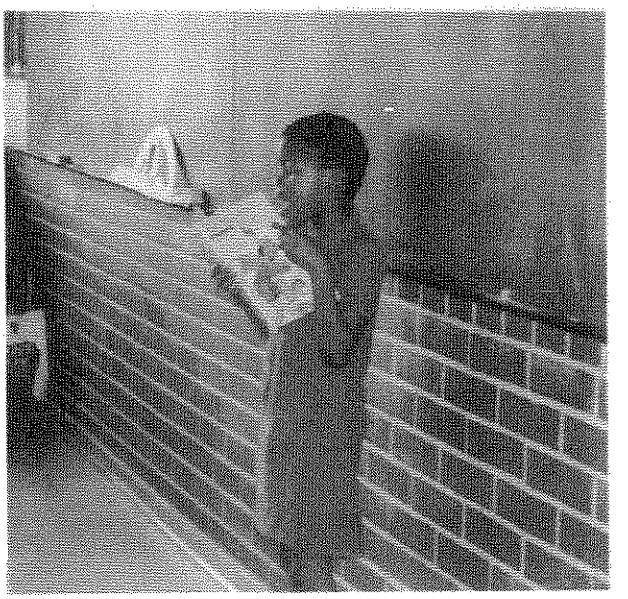
ケープタウンの郊外は巨大な岩山の続く高原で、荒れ果てた石ころばかりの無人地帯と緑豊かな果樹園地帯が入り混じっている。果樹園の経営者は今も99%が白人で、黒人やその他の民族の人達は季節労働者ないしは失業者である。道路際の石ころばかりの斜面にかたまって掘っ立て小屋がぎっしり立っている。ジューンがいうには移動図書館やエルギンコミュニティカレッジを利用する子供たちの家はほとんどこのようなものだという。ここでは、トイレがなく道の反対側の空き地を使っているという。電気も来ていない。新政権の５カ年計画による住宅も所々に見られ、小さな家だがそこには電気が来ている。

【ワイナリー経営者の広大かつ豪華な公園】

ケープタウンの繁華街を歩くと黒人のストリートチルドレンが小さな声で何かつぶやいて目立たないようにちょっと手を出す。はっきり断らないといつまでもいつまでもついてくる。土曜日には彼らは道端でポリ容器などをドラム代わりに、細い体でリズミカルなダンスをしてお金を得る。日曜日、ジューンは好きな所に連れていってくれると言う。私達は白い砂浜と蒼い海、遠く青空に白く浮かぶテーブルマウンテンを見た後、ワイナリーを訪ねる。地平線まで丘陵地帯にうねるように続く葡萄畑。ワイナリーの標示を見て国道からずっと奥へ入ると木々と花々の中に白いワイン工場と経営者の家が静かなたたずまいを見せる。すべてが美しく規模が大きい。その最たるものにスピア公園がある。大きなワイナリー経営者の私営の公園で、新宿御苑くらいはありそうだ。誰でも無料ではいることができるが、ジューンと私達以外は白人ばかりであった。チーターなどの動物園、本格的なオペラハウス、大きな池、美しい芝生の庭園と手入れの届いた花々、レストラン、ワイナリー主の広大な邸宅。この公園専用のケープからの鉄道と瀟洒な駅もある。汽車が着きオペラ見物の上品な紳士淑女が着飾って下りてきた。すべて白人である。こうした世界が現存しているのが南アなのだ。

２）ダーバン

問題点：NGOのELETにはこの７年間、英語の本を数万冊送り、スタッフのサラリーの一部をTAAAから援助してきた。ELETと会合を持つこと、ELETが、本を配布し読書指導を行ってきた学校を訪ねること。もう一つはクワズールナタール州教育省に次回の移動図書館車を送るプランに関する実務について教育省事務次官

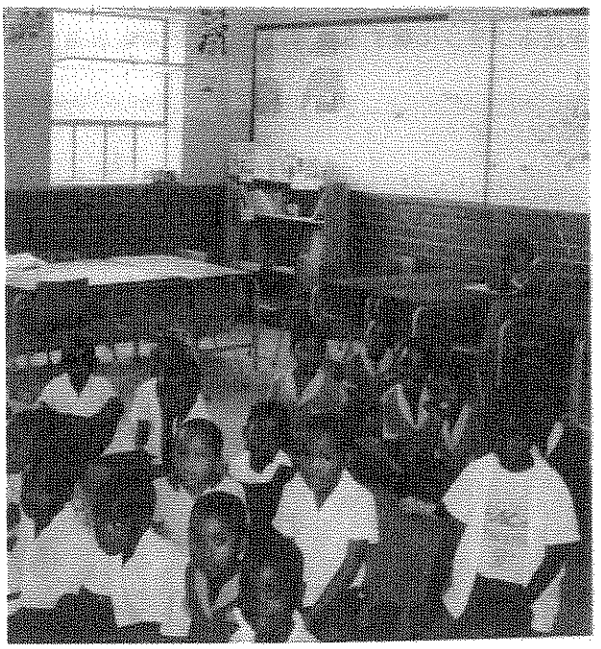


日本から来た本を教室で使っている(ダーバン)

のシボンギレ・ンジマンデと話し合うことである。今回の訪問以前にユネスコの菊川氏がシボンギレと実施計画に関してほぼ、話を煮詰めておいてくれた。

【English Language Educational Trust(ELET)】

迎えに来たELETのシボンギレとググの車でダーバン郊外の黒人の住むイナンダのグレボの小学校を訪ねる。この学校のマンケラ先生からの報告は、会報22号のＰ２に紹介されている。生徒数は962人。生徒たちの家庭は60～70%が失業者。30～40%は授業料が払えない。そうした家庭には政府の援助を受ける手続きをとる。１年生ではこの地域の学校はズールー語で授業。２年から英語になる。教科書は数人に1冊。この学校にはELETを通じてTAAAの送った本が各教室に配布され読書コーナーに置かれている。小さな３段くらいの棚に10～20冊が並び、放課後には紛失防止のために鍵をかけている先生もいた。子供たちは私達とELETのスタッフのためにすばらしいコーラスを聞かせてくれた。音感の優れた彼らは無伴奏で歌詞も全部暗記で次から次へと振りをつけて歌い続けてくれる。中に「私達は本が大好き大好き」という楽しい歌もあった。その後ELETの事務所を訪問、代表のマーヴィン・オグルと会談。ELETは健在ではあるが財政的には苦しいので、図書指導も含めてTAAAから送られた本を配布するスタッフのサラリーをTAAAから今後も援助してもらいたいとのことであった。



教室の片隅にTAAAからの本が置かれている(ダーバン)

【クワズールーナタール州（ＫＺＮ）教育省】

TAAAが浦和市に保管している移動図書館車の内の１台を南アの中でも特に貧しい北部州教育省に送る案も検討したが、予算の捻出が懸念されるため見送り、州として比較的豊かなKZNに運行主体を変えたのであった。この間のリサーチは菊川氏の協力によるところが大きかった。州の教育事務次官シボンギレ・ンジマンデとELETの事務所を借りて会議を持つ。移動図書館の必要度が高いこと、70万ランド（約1400万円）の予算が準備されていること、運行準備すべてが整っていること、事務手続き等のことを確認し合った。そのうえで次回の車検証の英語訳を渡し、南ア通産省に免税許可願いを申請するようンジマンデに依頼した。

ダーバンの美しい海水浴場では1994年訪問時に人種隔離は既になかったが、黒人が泳いでいる姿は皆無であった。５年後の現在は大勢の黒人が水泳を楽しんでいる。しかし、一方で浜辺周辺にはたくさんの痩せた黒人の子供たちが汚れた服を着て、お金を求めて手を差し出している。

３）ジョハネスバーグ周辺

問題点：ハウテン州教育省にはこれまでに３台の車が届いている。１台はELETで使用していたものを移譲したのでそのまま稼動できたが、２台は車の登録がなかなかできず、申請中のまま日が過ぎている。そして現在日本に保管中の２台は免税申請中で数ヶ月が過ぎている。これらの手続きを急がせるべく、何らかの措置を取ることも訪問の目的のひとつであった。

ベノニのデヴェトンでは1996年からTAAAとの共同事業としての移動図書館がNGOのＭＥＩの手で行われている。この３年間、移動図書館の整備と運行に全てをかけて尽力してくれていたマーガレット・グレイヤーが1月に肺ガンでこの世を去った今、どのように運行されているのか。

【ハウテン州教育省】

菊川氏と私達は２月８日ジョハネスバーグのハウテン教育相図書情報サービス部を訪れる。ハウテン州教育大臣イグナス・ジャコブス氏、ケラー部長、図書担当ブシはじめスタッフ、ゼネックス財団（ガソリンのドナー）ティンドレニ氏、ユネスコの菊川氏、ＴＡＡＡのメンバーで会議を持つ。教育大臣がこのランクの会議に出席することは異例であり、ケラー部長は、これは図書活動がいかに注目されているかを表していると言って興奮していた。大臣は学校の図書担当の教員を校長の次のランクに格上げすることを約束し、

ハウテン州教育大臣と 野田(左)と山田

全員から拍手を浴びた。

午後は２台めの車が運行する予定のオレンジファームを訪問する。プレトリアから110キロのラファツェ小学校は782人、教員20人。ラフェラ中学校は1332人、教員32人。この地区には29の学校がある。教科書は数人に1冊。ソト語とズールー語が話されている。民族語の本が図書室に５％あるが、政府では民族語の本や教科書をよこさないから、低学年用に民間から高く買わなければならないと、いう。"図書室"を見せてもらったが、古いよれよれの教科書が置かれている程度でとても図書室と呼べるような状態ではなかった。教科書は数人に１冊。１日も早くここに移動図書館車が巡回する事を願わずにいられなかった。

明くる９日、モザンビークの大洪水の始まりとなる大豪雨の中を、偶然にも前日に待ちに待った車の登録に成功した図書館車に同行してショーシャングヴェへ向かう。運行業務にたずさわるのはプレトリア公立図書館の優秀な司書たちである。ショーシャングヴェについてはこの車に携わっていたことのある山田さんの報告をお読みいただきたい。

【デヴェトンの移動図書館】

引き続く異例の雨の中を翌日午前中、ベノニ市のデヴェトンへ出かける。MEIを資金面から援助するセントアンドリュース財団のモリス、教育省のブシ、公文教育研究会南ア事務局長の藤戸氏が同行した。マーガレット亡き後、アリソンとジョージがドライバーと３人で奮闘し、10の学校に巡回している。1997年までは２校、1998年には4校、1999年には7校、そして今年からは10校に巡回している。今年１月の貸し出し冊数は約4600冊。平均３週間に1回ずつ訪問し、教員たちが生徒のために数10冊単位で借りていく。この10校の生徒総数は約１万人である。アリソンはこの日、午前中だけで５校を私達が見て回れるよう、準備を整えておいてくれた。この移動図書館に携わってくれている３人はボランティアの常勤である。アリソンとドライバーのビリーの給料はセントアンドリュース財団が財政難の中から寄付を募って賄い、助手のジョージの給料は教育省から支払われている。財団の資金が不安定であるため、できればTAAAから支援してもらえればありがたいとMEIの代表デイヴは言っている。MEIはスタッフの不足を補うためにコンピューターを導入して短時間で、間違いのない貸し出しと返却を行なっている。紛失率の少なさに司書の山田さんは驚いていた。もっとも生徒が直接借りるのではなく、すべて学校の教員が借りたものを責任をもって子供たちに貸し出す方式をとっているからだろう。

教員が借りた本は各教室の隅に読書コーナーとして置かれ、子供たちは自由に読むことができる。一部は家庭に持ち帰らせている教室もある。デヴェトンでも訪ねた学校の教科書の配布状況は数人に１冊、良いところでも２人に１冊であった。運行の予算さえあれば２台でも３台でもデヴェトンに走らせてすべての学校に巡回をしたいというのがMEIの希望である。７万人の生徒がいるが、現在、恩恵を受けているのは１万人にすぎない。

４）その後

私達が訪問した２月初旬から４月半ばの現在までにいくつかの進展が見られた。

ケープでは車の登録が取れて、５月４日に初運行の式典を州の教育大臣臨席のもとに行なうという知らせがジューンからきた。また、ハウテン州では同じく３台目の車の登録が済み、５月２日に運行式典を行なう。しかしハウテン州のこれから送る２台の免税許可が下り、やれやれと船便を決める寸前に許可証の一部に車体番号の間違いを見つけ、訂正を要請して再発行を待っているところである。許可証の期限についても１ヶ月しかなく、船の到着時には期限切れという許可証であった。種々の問題を常に解決しつつ、時間はかかっても少しずつ実現していく目算はついてきている。

ハウテン州の移動図書館活動

山田玲子（司書）

移動図書館のベースとなるのは、ハウテン州教育図書館で、ビデオ、逐次刊行物、本（教師と学習者向けそれぞれ）、CD、CD-ROM、ポスター、スライド、コンピュータプログラム、OHP 用のシート、音楽カセットテープ、教科書（研究用）、パペット、楽譜などの多種多様な資料を取り揃えている。教育に関する調査、図書の展示やワークショップなど、教育支援、教員の訓練のための活動も行っている。スタッフは全部で22名。学習プログラムに合わせて選定した本のリストなども作成している。

巡回先の選定については、予め 18 の地区に知らせ、来て欲しいという希望のあったところに優先的に行うことにした。そのうちの1つがショシャングベ地区である。ハウテン州では、現在合わせて3台を所有しているが、あとプラス2台あれば全ての地域をカバーできると考えているという。各校への巡回は、月2回程度を予定している。

教育図書館のあるプレトリアから約 45km、今回初めての巡回を行ったモコニャマ小学校は、1～9学年までの生徒数 1,793 人、教師は 44 名。大きな学校でのモデルケースとなる。教科書は2人に1冊と比較的恵まれた方ではあるが、教科書以外のリーディングブックスがまだまだ足りないという。

今回が初めての巡回になるため、移動図書館の4人のスタッフの他に、スクールライブラリー・ファシリテーター（学校図書館活動のアドバイザー。日本には該当するものはないと思われる）など数名の関係者と訪れた。この中には、移動図書館にガソリンとメンテナンスを提供する、地元の石油会社の担当者も参加した。

学校では先生達に集まってもらい、移動図書館の利用についての説明会を開いた。図書館側からは、使いたい資料があれば予め言ってもらえれば持ってくるし、緊急に必要なら移動図書館以外の方法でも持ってくる、積極的にどんどん使ってもらいたいと強くアピールした。貸出の期間も原則としては4週間だが、必要に応じて延長も可能である。生徒へ貸出も先生の責任において可能だし、とにかく先生達が利用してくれることにこのプロジェクトの意味がある、と熱っぽく語った。また、先生達は正に全身を耳にして説明に聞き入り、質問も次々と出た。

そしていよいよ実際に外に出て移動図書館を目にすると、先生達の目が輝いた。図書館員が資料を手に取り詳しい説明を始める側で、先生達も書架にきれいに並べられた絵本などを早速手にとって選び始める。移動図書館は 20～30 人の先生達にあっという間に取り囲まれ、人だかりができた。

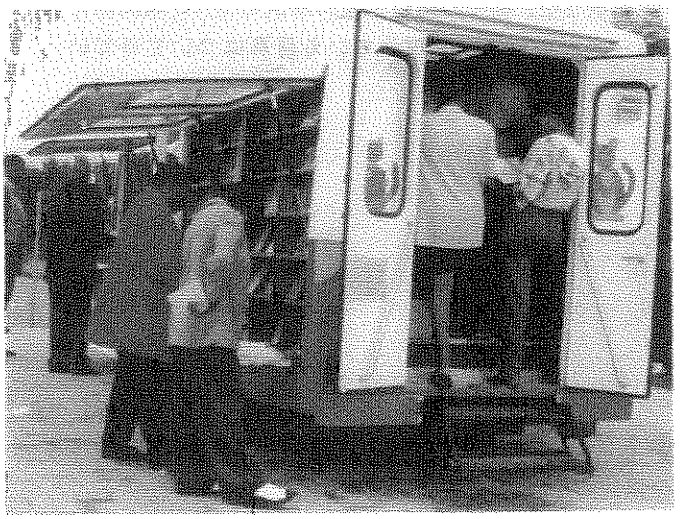
貸出の手続きは非常に簡単。利用の申し込みカードに名前などを書き込み、本と一緒に差し出すと、司書が本の内側についたポケットから図書のカードを取り出し、先生のカードと一緒に輪ゴムでとめる。それでおしまい。これなら、あっという間にたくさんの貸出を処理することができる。早速次の時にこんな資料を持ってきて欲しいと司書に相談する先生の姿も見られた。司書はてきぱきとメモをとりながら、アドバイスも与える。

移動図書館には、教育図書館から持ってきた様々な種類の資料が積まれている。絵本の他に、授業で使えそうな地図や図表のポスター、パネルシアター、パペットなど。（これも日本の移動図書館には、珍しいことだ。ただし、パペットは数が少ないので、もっともっと欲しいのだと話していた。）

図書館関係者も学校も、この時を待っていたのだという想いが強く伝わってきて胸が熱くなった。

さて、最後になるが、このショシャングベ地区を巡回する移動図書館は、私にとっては特別の感慨がある。と言うのは、この車が日本で活躍していた姿をよく知っていたからだ。外見は南ア風にきれいにペイントされていたものの、見間違うはずもない。もともとは埼玉県浦和市で「しらさぎ号」として市民に長く親しまれてきたこの車は、排ガス規制により日本国内を走れなくなり、1998 年に TAAA の手により南アに送られた。かつては私もこの車に乗って、市内の小学校や公民館、団地などを度々訪れたものだ。学校では放課後に、子ども達がランドセルを投げ捨てるようにして駆け寄ってくる。そんな光景がこれからこの南アでも見られるのだろう。

移動図書館は子ども達の生活の中にダイレクトに入っていける優れた手段である。本を読むことが、彼らの生活の一部として当たり前になり、そんな環境の中で育まれた子ども達が大人になって社会を動かすようになるとき、この国の未来は変わっていくのではないだろうか。移動図書館の果たす役割は大きい。



熱心に本を選ぶ先生達

移動学校図書館

ー南アフリカの貧困地域における一つの可能性ー　その３（最終回）

西ケープ州教育省（WCED）の場合

ジューン　バージス
（西ケープ州教育省図書館情報サービス部
メディアアドバイザー）

《背景》

冒頭で述べられているように、マシフンデスは2台のバスをそれぞれセレス市とハルマナス市のコミュニティーのためにTAAAから寄贈されたのですが、それ以来使われないままになっています。政策の転換によって、必要な運営資金が確保できなくなったというのが理由ですが、さらに悪いことには、それぞれの市役所は図書館車を他の目的（救急車や、単なる普通のバス）として使おうとしていることが最近判明しました。

そういった現状を嘆いて、WCEDの図書館サービス部のメディアアドバイザーであるバージス女史は、民間のNGO組織である、グラボウ地区のエルギンコミュニティーカレッジに、ハルマナスにある図書館車をWCEDと、グラボウそしてハルマナスのタウンシップ地区である、ズエヒル地区にて共同運営するという案を提案しました。まずは、どの学校を巡回するべきかというニーズ分析を実施し、どの道路を使用し、如何に運営するのが一番良いのかを熟考しました。まだ、バス自体はハルマナス市の車庫から取り出せていませんが、幸い、カレッジは地区の教員用のセンターを建設中で、そのセンターに安全な図書館車用の車庫を併設する考えです。バージス女史はまた、1998年度のユネスコ児童文庫賞を受賞した際の賞金を、移動図書館のさらなる図書購入費にあてる予定です。また、彼女は、ユネスコのプレトリア事務所からあらゆる技術的、専門的支援を得ていますし、WCED自体、図書購入の費用と、車両の登録費、そして2人のメディアアドバイザーの給与を確保することになっています。

《目的と想定される便益者》

WCEDの移動図書館事業における大枠の目的は以下の通りです。

- 遠隔地にある農村地域において、識字を促進し図書館サービスの拡大を図る。
- 成果重視主義に基づく、「カリキュラム2005」を支援するあらゆる教材、図書へのアクセスを確保し、生涯学習のための環境を充実させる。
- 対象となる学校へ視聴覚教材、施設へのアクセスを確保する。

そして、対象となる便益者は、

- グラボウ地区のファームスクール、そしてハルマナスのズエヒル地区の学校。
- セレスの学校と、トルバグ、そしてウォルスレー地区のファームスクール。

セレス地区を巡回する図書館車は、ステインサル小学校に保管され、学校の図書館が書庫替わりになる予定です。また、小学校に付設されている「子供の家」にも、WCEDとトルバクにある公共図書館の協力により、多くの良質な図書が置かれています。両図書館車を管理・運営するために、コミッティーが設立される計画で、教員、学校長、地区の住民、スポンサー、そしてWCEDのメディアアドバイザーから構成される予定です。

《パートナーシップ、そして予算》

エルギンコミュニティーカレッジは地域のバス会社に図書館車の維持管理費について支援を求める予定で、一方WCEDは石油会社に対して、各社の広告を図書館車に掲載する条件でガソリンを無料で供給してもらえるよう交渉中です（交渉の結果、話がまとまるようです）。それから、バージス女史は最近も、国際図書館協会連盟（IFLA）の1999年度グースト・ヴァン・ウエスマエル賞を受賞し（約16000ランド）、彼女はこの賞金を、図書館車の保険・車両登録費関連に当てる予定です。

また、書庫の内容に関しては、WCEDは適切な図書を選択し、登録事務等のためのラップトップコンピューター

を供給することになっていますし、ホウソンにある公共図書館が関わる学校の教員の司書訓練を実施する予定で、もろもろの博物館やプレトリアの映画博物館からブックローンをしてもらえるように交渉中です。それから、BiS（図書館と社会、スウェーデンのNGO）から、いくらかの財政的支援をしてもらえる予定です。

最後に、興味深い提案としては、サービス対象地域における主な食料品店へ、スープを作るための材料の供給をもとめる予定があることです。これは、図書館車が、各学校を訪問した時に、教員達が図書を選んでいる間に、子供達には、紙芝居会の合間にスープやパンを与えることを目的としています。実際、多くの子供達にとって、これが1日1回のまともな食事の機会になるでしょう。

《プロジェクト計画》

プロジェクトは以下のような3つの過程から成立します。

1. 図書館車を再登録し、新しい車庫に運び、ストックを準備する。（６ヶ月）
2. 巡回ルートを入念に検討し、スープを作ってくれるようなスタッフを確保し、教員に対する訓練を実施する。また、定期的な評価とドナーに対して報告を行う。（６ヶ月）
3. エルギンコミュニティーカレッジに、最終的なリソースセンターを建設する。

《結論》

本こそが、長い闇のトンネルの終わりにある灯火です。読書の権利はすべての南アフリカ人に認められているとの考えのもとWCEDが責任をもつこのプロジェクトは、他の図書館事業とも連携して行われます。私達の目的は、移動図書館を通して、本を読む喜びを一人でも多くの裸足で寒さに震える子供達に与えることです。

《今後に向けて》

上述したようなさまざまな肯定的なアクションを経て、現在、南ア中央政府教育省とユネスコは、これらの移動図書館事業を貧困地域におけるアウトリーチプログラムとして南ア中に普及拡大しようとしています。

最初の段階としては、最近、中央政府教育省とユネスコは、北部州文化、芸術、スポーツ省との間に、新しいパイロット事業を始めるために仮合意を締結しました。北部州担当者による仮実施計画書によれば、移動図書館車はピーターズバーグから、北部州中の公共、学校図書館を巡回する予定です。メンテナンスのことを考慮して、基本的には整備された道路を通り、安全な車庫にその都度保管されることになります。一つのルートには基本的に毎月2週間が当てられ、その後の2週間はピーターズバーグで車両整備、ストックの積み替えを行う予定です。

プロジェクトの直接目的は、多くの大衆に対して本にできるだけ接することができる環境を整備することによって、非識字者を最終的に無くすことにあります（北部州では人口の半分以上が非識字者ですが、最終的な目標は、今回のプロジェクトを通して、すべての南ア人の間に、読書の文化・習慣を形成し発展させ、将来的に彼、彼女達が、あらゆる種類の学習形態をとおして生涯学習人になることであります。これは、明らかにユネスコ公共図書館宣言に記されてあるすべての人の基本的権利です。

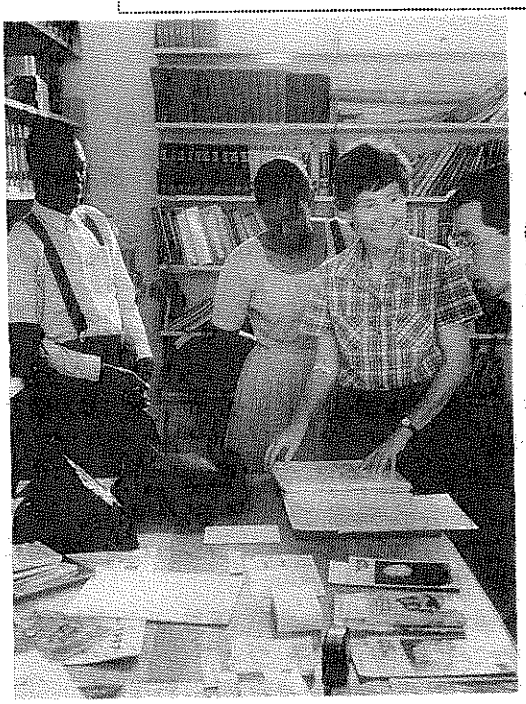
この原稿は先号のものと同じく、南アで行われた識字・読書に関するカンファレンスでの講演の草稿です。カンファレンスの正式なタイトルはReading for All; Pan- African Strategies - All-Africa Conference on children's reading - 。主催は南アの識字NGOのRead Educational Trust。後援は南ア中央政府教育省、ユネスコ、International Reading Association、世界銀行、British Council、ニュージーランド開発庁。スポンサーは諸々の南ア企業。

（訳と解説　菊川 穣）

連載はこれで終わります

マーガレット・グレイヤーを偲んで

2000年1月30日、数年間の闘病生活の中で、デベトンの移動図書館活動に最後の力を注いでいたマーガレット・グレイヤーさんが亡くなりました。54歳でした。
謹んでご冥福をお祈りいたします。



1997年11月 デベトン移動図書館書庫にて注射の後も痛々しいマーガレット・グレイヤー（右から2人目）、右は北爪さん(TAAA)

デイヴィッド・ベントレー（ＭＥＩ代表）

マーガレット（メグ）・グレイヤーは、多くの面で天使でした。彼女は教会（ベノニ市内セント・アンドリューズ長老教会）で精力的に説教やカウンセリングをしていましたが、そこで人々に大きな影響を与えていました。お葬式に参列した多くの人々が、彼女の影響力を物語っていました。

MEIの移動図書館車においてもメグは天使でした。必要な時に来てくれて、夢を現実に変える手助けをしてくれました。1996年末、MEIには移動図書館車があり、本が多数あり、倉庫や車庫もありました。一番必要としていたのは、図書館を運営してくれる人でした。私たちが焦りはじめたまさにその時、メグから電話がありました。いままで学校（セントアンドリューズ校）を介してデベトンでの開発プログラムに関わっていたのが、そのプロジェクトが中止になったので、他にすることを探しているというのです。彼女は私たちの祈りに応えてくれた天使でした。こうして図書館車を軌道に乗せる仕事が始まりました。

メグは、学校に行ったり、貸出方法を計画したり、コンピューターに図書を登録したりと、疲れを知らずに働きました。現在約６千冊もの本が貸し出しされているのは、彼女の努力のたまものです。メグは癌と診断された後も長く移動図書館車のために一生懸命働き続けました。時には体の許す範囲を超えて自分を駆り立てていました。

メグは、死の床でさえ移動図書館車のことを楽しそうに話していて、いつも計画を立てていました。自分がその計画を実行することができないのを知りながら。

彼女は自分がいなくなった後も移動図書館が引き続き成長していくことだけを願っていました。私たちはいつでもメグのこと、そして彼女の図書館に対する大いなる貢献を忘れないでいます。メグは天国から、この世での自分の仕事の出来映えを満足して眺めていることことでしょう。

（訳：久我祐子）

メグの思い出

工藤睦子（司書）

マーガレット・グレイヤーさんは、私が心から尊敬する方です。頭が良くて、かっこよくて、思いやりがあって、いつもきらきら輝いていました。世界の人々に共通なもの、それは知らないことを知る喜び、そして我が子を失う悲しみだと思います。メグは、人びとが学ぶことを支援しながら、自分にとってもそれは生涯学習なのだと、それがうれしいし楽しいことだと言いました。私はメグの中に自分と共通するものを発見して、それをライブラリアンシップというのかわかりませんが、涙が出るほどうれしく思いました。メグはこれからもみんなの心の中に生きて、ＴＡＡＡの活動を応援してくれると思います。